

孫秉熙の「用日」戦略とその限界：日本亡命期 (1901—1906) の足跡と思想を中心に

孔, 牧誠

<https://hdl.handle.net/2324/2534509>

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（学術）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 孔 牧誠

論 文 名 : 孫秉熙の「用日」戦略とその限界
—日本亡命期 (1901-1906) の足跡と思想を中心に—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

朝鮮（韓国）の近代史は激動の時代であった。その中で 1894 年に起きた東学農民戦争から日清戦争、日露戦争、1919 年の 3・1 独立万歳運動までの間、孫秉熙（ソンビョンヒ）(1861-1922) は朝鮮近代史の主役の一人として大きな役割を担っていた人物である。「国土が小さく、軍隊も小さければ、強い兵力を有する隣国に、金と穀物を差し出してでも兵員を雇い、百戦百勝しなければならない」日露戦争前後、孫秉熙の意中はこの一言で表すことができる。彼は、身分制度で絶対に出世できない庶子として生まれた。彼は当時の東学に入教する人々と同じく差別の恨みを持って東学信徒になる。万民平等を叫ぶ東学は、朝鮮の統治根幹である身分制度を揺るがしたため、創教してから継続して政府の弾圧を受けた。その結果、東学の教主らが処刑され、孫秉熙が東学の第 3 代教主になった。

孫秉熙は教団が政府の弾圧から抜けて正式な公認を受けるためには、西洋近代知識と政治結社が必要だと判断して日本へ亡命する。「用日」戦略で教団と民族の啓蒙を実践したが、日韓併合によって制約が生じた。孫は、国の独立を図るために独立運動を準備した。韓国人も植民地支配という特殊な状況で「民族」、「国」、「独立」の観念が成熟していった。結局、独立宣言という導火線が 3.1 独立万歳運動に繋がり、今日の韓国人のアイデンティティの根幹として形成されたのである。

このような韓国の近代史において大事な部分に位置付けられている孫秉熙にもかかわらず、彼に関する研究は意外にも少ない。従来の日韓両国内の孫秉熙に関する研究では、彼の宗教思想や独立宣言書の朗読者として読みあげる点に偏っている。もっとも、孫を扱った研究では、彼の思想や足跡の上でのターニングポイントが抜けている。それは、1901 年から約 5 年間の日本亡命期である。本研究では、孫秉熙の思想の変化が一番大きかった当該時期が欠落しているという、これまでの研究状況の問題点を踏まえて孫秉熙の思想の変化、特に「用日」戦略を中心に検討する。

第一章では、孫秉熙の思想の背景にあたる幼少期から東学に入信する過程、そして孫が接した東学の思想を探る。そして、東学信徒と孫秉熙が参加した東学農民戦争を通じて、国を守る力がない弱い国が歩まなければならない道を孫秉熙はどのように認識していたのかを分析する。

第二章では、孫秉熙が「用日」の第一歩として、10年間の計画を予定した彼の外遊の目的地が、アメリカから日本に変更された理由と人的交流を検討する。特に、『三戦論』、「秕政改革案」などの書物から読み取れる孫の思想の変化を考察する。また、孫秉熙は日本亡命期に富豪のような生活をしたと知られている。しかし、今まで孫の資金の出所を探った研究はまったくない。本章では、孫の豊富な資金の入手経路を初めて明らかにする。

第三章では、孫秉熙と東学教団の日本軍支援に焦点を当てる。孫秉熙は日本亡命期に勃発した日露戦争を機会として民会の組織を命じた。これは、教団の体制が従来の「教政分離」から「教政一致」に転換したことを意味する。孫秉熙はどのような意図をもって日本軍を支持したのか。それを明らかにするために、民会の設立過程と活動、民会が志向した究極的な目的を検討する。

第四章では、1905年に孫秉熙が執筆した『準備時代』（1905年）を分析する。『準備時代』は『三戦論』（1902年）、「明理傳」（1903年）とともに、彼が日本亡命中に著述したが、今まで『準備時代』を分析した前例はない。また、強〔軍事力〕、富、文明、自由を実現した後に孫秉熙が望ましく思っていた「国家観」を考察する。

第五章では、帰国以後の孫秉熙の足跡を明らかにする。特に、無事に帰国が可能であった理由を探る。また、孫秉熙は独立宣言と独立運動に深くかかわったが、その後の裁判訊問に対しては、それまでの行動に比して消極的な姿勢をみせた。本章では、裁判関係資料を通じて孫の真意に迫る。

結論では、以上の全章すなわち、孫秉熙の一生を通して彼が達成しようとした目標、そして、そのために発生した多様な問題が単に個人的な問題にとどまらず、自身の教団そして国まで及ぼした影響を検討する。